令和7年度 公立鳥取環境大学
学校推薦型選抜（Ⅱ型）問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 解答開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は3ページ、解答用紙は1枚です。
3. 解答用紙の所定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、問1～3に答えなさい。

「農は自然の恵み」「食は生命の糧」など、聞いたことあると思います。たぶん「農業」というと、自然豊かな緑の大地に鶏や豚や牛が放たれ、黒々とした豊かな土壌の畑に青々とした作物が育つイメージを持つでしょう。日本では稲が整然と並んだ水田や里山を思い浮かべる人が多いかも。そして「食」というと、おいしい、健やか、まごころという温かいイメージや、和食など伝統や文化として語られることが多いでしょう。

残念ながら、現在の農業や食料の生産現場は、そんなのどかな姿ではありません。

地平線まで広がる畑で農薬や化学肥料や遺伝子操作した種子を使って、大きな機械を石油で動かして、売って儲けるために大豆やトウモロコシなど一つの作物だけを大量に栽培する。その穀物をエサに、鶏や豚や牛は「動物工場」とも言われる狭い空間に押し込められて¹、日に当たることも外の風に吹かれることもほとんどなく短い生涯を終えて、肉や乳製品や卵や羽毛が大量生産される。

こんな工業的農業・食料生産のために、石油や化学薬品やプラスチックや水やエネルギーを大量に使って、二酸化炭素やメタンやふん尿などを大量に排出しています。

近年は、病気でもないのに家畜に抗生物質を使いすぎたことから、薬が効かない耐性菌がでてきたり、鳥インフルエンザ、狂牛病、豚インフルエンザ、豚コレラと、家畜の病気が次々と発生したりと、畜産業も大変な状況です。そして、病気が発生する度に、大量の生命が無益に廃棄されています。「鳥インフルエンザ 殺処分」というキーワードでネットニュースを検索してみてください。2021年の初めにも日本で900万羽もの鳥が殺され捨てられた記事が見つかるでしょう。これはほんの一例です。同じ動物を大量に「密」に飼うことは、病原体の温床となりかねません。

こうして、現在の農業と食料システムは、地球環境と人の健康と地域社会を破壊している一大要因だと批判されるほどになってしまいました。

(中略)

お金がないと食べられないって、当たり前でしょうか。今日のご飯どうすると聞かれたら、コンビニで買うとか、学食で食べようとか、考える人が多いと思います。ときには家で料理をしたり、家族が作ってくれたご飯を食べたり。でもその食材はスーパーや生協などで購入する。最近ではテイクアウトしたりネット注文したりするかも。つまり、現在では「買い食い」が当たり前になっているといえるでしょう。

でも、人類の歴史をふり返ると、これは比較的新しい現象です。毎日の食を確保することは、狩猟採取の古代から現在まで生きるために必須な行為です。ただ、食べるために働くことの意味が変わりました。

かつて世界のほとんどの地域で大多数の人たちは、自然に近い農村に住み、自分たちの食べるモノ、着るモノ、使う道具などを、基本的には自分たちで作って、食べたり着たり使ったりしていました。労働とは、自分や家族が使用するモノを自分たちで作ること。田畑を耕

し、種をまいて作物を育て、家畜の世話をし、その収穫物を料理して食べ、その残骸やふん尿を土に戻して地力を保つ。そのための資源は、自分の田畑か借りた土地か、村が共同で使う野山や川や海など周りの自然環境でした。

このような、生活のためにみんな管理して利用するみんなの資源を日本では入会地と呼んだり、英語では「コモンズ (commons)」と呼んだりします。

自然環境とは共有財産で、そこで生活し、その資源で自分たちが生きていくために必要なもの。だからこそ、この生活の基盤を護るためにいろんなルールが決められていました。みんなの財産といっても、だれもが好き勝手に使えたわけではありません。自然を利用させてもらいながらも子孫の代まで維持できるよう、土の力を回復するために堆肥を入れたり、木を植え山の手入れをしたり、魚を捕る時期や量を制限したりして、環境を持続させていたのです。

ところが、200~300年ほど前から、多くの人たちが農村を離れ、都市部の工場や商店で働き始めました。自分の土地も村の共有財産も失い、自力では食べるモノ・使うモノを作れない。だから、他者(=資本家)の土地や工場で、決められ時間、決められた仕事をして(=賃労働)、その稼いだお金で食品や必要なモノを買う。つまり賃金を得るために労働して、そのお金で、食べたり、着たり、使ったりするモノを買うようになりました。

現在では当たり前かもしれませんが、賃労働という、他の人に雇われて、生活とは切り離された工場や会社に行き働いて、その代わりに賃金を受け取るという労働の形は、資本主義社会に入り産業革命のころに始まった新しい働き方²でした。

すると、この労働者たちが必要とするモノを代わりに供給する産業が形成されます。モノを買う「消費者」が集まった「市場」に向け、売って儲けるために「商品」を製造する産業、その商品を流通したり小売りしたりする産業などが作られていったというわけです。食べるモノも、自分で栽培する・育てるモノから、企業など他の人たちが製造した「食べられる商品=食品」へと変わりました。

ここでポイントは、「商品」とは、市場で他の人に売って利潤を得るために生産する³モノであって、自分で使うために作るモノではないということ。そして、自分で使うために作るモノと、売って利潤を得るために作るモノとでは、違ってくるといえることです。自分で使うためにモノを作るときには、空腹を満たして元気になるとか、寒さを防ぐとか、長く使えるとか、役に立つことが重要でしょう。そのモノを作るための資源や知恵やスキルを自分が持ち続けることも大切です。

対して、「商品」としてモノを作るときには、売って利潤を得ることが第一目的です。儲けるために作っているのですから、いくらで売っていくら儲けられるかが重要になります。儲けるための「商品」として生産されるようになったとき、砂糖や小麦や大豆がどのように変わったか、この本の歴史の中で見てみてください。

出典：平賀緑（2021年）「岩波ジュニア新書 937 食べものから学ぶ世界史」岩波書店より抜粋し、一部改変を行った。

問 1. 下線部 1 に関して、「食料」として生産される動物は効率性を重視して飼養されるのですが、なぜ狭い空間に押し込められる必要があると考えますか。30 字以上 45 字以内で説明しなさい。

問 2. 下線部 2 に関して、産業革命以前の働き方と新しい働き方とでは何が異なっているのか、150 字以上 200 字以内で説明しなさい。

問 3. 下線部 3 に関して、食料が市場で販売するための「商品」として生産されることにはメリットとデメリットの双方があると思われる。そこで、どのようなメリット並びにデメリットがあると考えられるか、200 字以上 300 字以内で説明しなさい。